

日本記者クラブ

著者と語る

『日めくり子規・漱石 俳句でめぐる 365 日』

この
神野紗希・俳人

2018年9月4日

神野紗希さんは松山市出身。地元の高校時代に「俳句甲子園」に出場し、俳句に出会う。高校3年生の時に俳句甲子園で優勝。NHKのBS番組「俳句天国」の司会に抜擢され、それをきっかけに俳人の道に進むことになる。現在、現代俳句協会の青年部長を務める。

正岡子規と夏目漱石は慶応3年（1867）の同年生まれで、2017年に生誕150年を迎えた。著書は、それを記念して、子規の地元の愛媛新聞社が企画し、昨年1年間の連載をまとめたもの。2人のほかに門人や友人53人の句も紹介している。「2人の俳句を同時に、さらに周辺の人々の句まで一緒に取りあげるのは初の試みで、とても大変だったがやりがいもあった」と語る。

「何者でもなかった時期に2人が交流したことで、子規が子規に、漱石が漱石になった。その2人が過ごした濃密な時間を追いかけていたいというのが今回の自分のコンセプトだった」とする。

この2人の交流から、子規のもっともよく知られる「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の句が生まれたという。この句のできる約1ヵ月前の明治28年9月に漱石が「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」を詠んでいた。これは、漱石の松山の下宿「愚陀仏庵」で子規と漱石が同居し、一緒に句をつくっていた時期にあたりと。

2人を果物にたとえた自句「楽観的蜜柑と思索的林檎」も披露した。どちらがどちらかを想像するのもたのしい。

司会：瀬口晴義 日本記者クラブ企画委員（東京新聞編集局次長）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会＝瀬口晴義 日本記者クラブ企画委員

(東京新聞編集局長) きょうは、日本記者クラブの「著者と語る」のシリーズで、『日めくり子規・漱石 俳句でめぐる 365 日』を書かれた神野紗希さんをお招きいたしました。

このご本のもとになったのは、2017 年 1 月から 1 年間、愛媛新聞に毎日連載されたコラムです。日めくり形式で、子規と漱石、その門人たちの俳句を解説され、休刊日を除いて毎日連載したものに、休刊日の分もつけ加えて刊行された。読んでみたのですが、すばらしい本だと思います。

ちなみに、毎日出ているので、きょう 9 月 4 日の俳句は、「ツクゝゝボーシツクゝゝボーシバカリナリ」。これは子規の俳句ですけれども、読んでみると、ことしは、そういえばツクツクボーシを全然聞いていないなど。大体この季節、いつも鳴きまくっているのですが、暑さによってことしは鳴いていないのかな、そんなことも思ったりしました。

神野さんの略歴です。松山の出身でいらっしゃいまして、高校時代に松山で開催されている俳句甲子園に出場された。それをきっかけに俳句を始められて、NHKのBS「俳句王国」の司会者や、Eテレの「俳句さく咲く！」という番組も担当していらっしゃいました。

きょうは、子規と漱石の俳句について、たっぷり語っていただいて、その後また質疑を通してうかがいたいと思います。

では、よろしく願いいたします。

神野紗希・俳人 よろしく願いいたします。神野紗希と申します。

9 月は、俳人にとってとっても特別な月です。それはなぜかというと、子規忌がある月、子規が亡くなった月だからです。季語の中にも、子規忌、獺祭忌、糸瓜忌というように、子規を悼んで、子規を思う季語が収録されています。

明治 35 年の 9 月 19 日、その日に子規は亡くなりましたが、その後もいろんな門人たちが子規を引き継いで、いま、こうやって私も現代、この平成の最後の時代にも俳句と向き合うことができるというのは、子規のおかげだなと思

っております。

きょうは、その子規忌のある大切な 9 月に、こうしたすばらしい場に呼んでいただいて、子規と漱石の話ができるということをとてもうれしく思っています。どうぞよろしく願いいたします。

まず、ちょっと感じていただこうかなと思って、お手元の資料をごらんいただいて、真ん中のところに、2 句、名前が書いていない句を挙げてみました。

どちらが子規でどちらが漱石の句ですか

「うつむいて谷見る熊や雪の岩」

「うつむいて膝にだきつく寒哉」という 2 句です。これ、どちらかが子規の句で、どちらかが漱石の句なんですけれども、どっちがどっちか、皆さんはわかりますか。

手を挙げていただきましょうか。

では、熊の句のほうが子規だと思う方。少なめですね。「うつむいて谷見る熊や雪の岩」が子規の俳句だと思う方。

では、逆にこの熊の句が漱石の句だと思う方。あ、こちらが漱石という方のほうが多いですかね。

実は、熊が正岡子規、そうなんです。「膝にだきつく」が漱石なんです。

これは明治 29 年 1 月 3 日に、根岸の子規庵でお正月の初句会をしたときに、子規と漱石が同じ句会場で句座を囲んで詠んだ俳句でした。

当時、漱石は松山に英語教師として赴任していたんですけれども、お正月休みで、実家のあるふるさと東京に戻ってきていて、根岸の子規庵に来ました。お弟子さんの高浜虚子や河東碧梧桐に加えて、ここでは森鷗外も一緒に句会に出ていました。「子規全集」の句会稿にも残っているんですけれども、その前の年、満州に従軍記者として正岡子規は大陸に渡っていたのですが、そっちに軍医として森鷗外がいて、そこで知り合って文学の話をして、誘って、この

お正月の句会に鷗外もということだったので、すごい場所ですね、考えてみると。

しかも、この句会ではいろんな兼題が出ていて、この句は、「うつむいて」という上五で始めて、この5音から始めて、しかも、冬の季語で詠んでくださいという、とても縛りの厳しい中で詠まれた句でした。でも、これだけ制約があるのに、むしろ定形があって、お題があるからこそ、2人の個性が際立っていると思います。

例えば、「うつむいて谷見る熊や雪の岩」、子規の句ですが、ここには人間が一切いませんよね。山の奥深く、深い谷をのぞき込む熊がいる。その熊が立っているのは、危うい雪の積もった岩の上である、いまにもツルリと滑りそうなんですけれども、危うくそこに生きている熊を見詰めました。本当にみたのかな。もしかしたら絵で、水墨画か何かでみたのかもしれないですけれども、想像を広げて詠んだという、人間の介在しない句です。とても客観的に自然を見詰めています。

一方、「うつむいて膝にだきつく寒哉」という句は漱石の句です。そう考えてみれば、人間の内面を見詰めている視線が、いかにも近代小説家らしいと言えるでしょうか。膝を抱いて、暗い部屋で寒い中、この寒さというのは、単に時節柄寒いというだけではなくて、心理的な寒さも投影されているだろうと思います。孤独を寒いと感じて、このように五七五になったのかなと思います。まだ漱石は小説を書いている時代ではないんですけれども、こんな小説を書く前の俳句にも後の小説家としての萌芽がみられるという一句です。

この『日めくり子規・漱石』という本は、正岡子規と夏目漱石、親友だった2人に、さらにその門下生や友人が本当にたくさんいるのです。子規・漱石は人の面倒もよくみまし、人に愛された2人でしたので、たくさんの周囲の人がいるんですが、その人たち、今回は365分の1ずつしか使えませんが、漱石、子規以外に53名しか取り上げられませんでした、でも、それだけの人の俳句を、季節に合わせて1日1句、合計365句、日めくり形式で解説した1冊です。

子規・漱石は同級生なので、昨年、2017年は子規・漱石生誕150年の記念の年でした。子規のふるさとで、漱石にもゆかりのある愛媛の地元の新聞、愛媛新聞社の企画で、去年、2017年1月1日から12月31日まで、1年間、愛媛新聞紙上に連載した原稿に、後で書籍にするときにコラムとして子規や漱石がやりとりした手紙であるとか、その後で漱石が亡くなった子規を思って書いた文章とか、そういったものも加えながら、略年表、オリジナルの人物相関図などを加えてまとめました。

愛媛新聞社さんから連載のお話をいただいたのは、一昨年の2016年の10月でした。実は連載が始まるまで3カ月を切っている状態からのスタートで、ハラハラしたんです。さらに、企画書をいただいて、そこに「日めくり俳句、子規、漱石、その門人たち」と書かれているのをみて、その門人たちというところに引っかかって、これは大変だぞとひるみしました。

育児の真っ最中に連載の依頼

というのも、子規自体でも、生涯に約2万4,000句の句を残しています。さらに漱石も小説を含めて膨大な資料がありますし、それを見るだけでも大変なんです、さらにその周囲の人たちの文献にも目を通していくとなると、どれだけ時間があっても、とてもじゃないけど終わらないぞというので、以前、少し調べたときに、子規の門人の資料は戦火で焼けてしまったりして、あまり残っていないんです。なので、手に入らないということも薄々わかっておりましたので、どうしようかな、連載まで3カ月も切っているし、しかも、当時、私、育児の真っ最中というか、初めての育児を始めたばかりでして、いま2歳の息子がいるんですけれども、その子がまだ0歳で、お乳を飲んでくらしいの時期だったので、生活的にはとてもお引き受けする余裕はなかったんですが、でも、何でお引き受けすることになったかということ、やはりやりたいなという気持ちでやることにしました。

私も、俳人という名前をいつからか名乗らせてもらうようになって、俳人という肩書を名乗っていると、世の中の人からすると、どのように生きているのか不思議なようで、「なぜ俳人になったんですか」とか、「いつから俳人として食べていこうと決めたんですか」というようなことを聞かれることがあります。

でも、特に何か大きな決断があったというよりは、AかBかどっちにしますかという小さな決断がその時々であって、そのたびに、こうしたほうがいいのかというよりも、私がこれをやりたい、俳句をやりたいなというほうに選んできた、小さな決断の積み重ねでいまがあるのかなと思っています。

俳句甲子園で俳句に出会う

ちょっとだけ私の来し方をお話しさせていただきますと、例えば、高校時代、先ほどご紹介いただいた「俳句甲子園」に出会ったのが俳句を始めたきっかけでした。地元が愛媛の松山なんです、その松山は正岡子規のふるさとでもあり、そこで高校生たちの俳句のイベント、俳句甲子園というのが開かれ始めたころでした。

当時は、ほかの部活もやっていましたし、勉強もしなければいけなかったんですけども、俳句甲子園、とってもおもしろそうだ、俳句をやってみよう、じゃ、やろうということで、俳句を始めました。俳句同好会をつくって、校内に「俳句甲子園に出ませんか」という張り紙を張って、そしたら、合唱部のマドンナとか、女子ボート部のエースとか、理系女子の一番頭のいい子とか、いろんなメンバーが集まって、5人いると俳句甲子園に出られますので、それで俳句甲子園を目指して、俳句をふだんから勉強したりつくったりするようになりました。

で、俳句甲子園で、最終的に3年生のときに優勝したのを、たまたまNHKのプロデューサーの方がみてくださっていて、そんなこともきっかけで、大学3年生のときに、NHKのBSで放送されていた、ちょっと地方発で全国放送

というのは珍しいのですけれども、「俳句王国」という番組がありました。これは句会をただ1時間、淡々と生放送でお送りするという、非常に贅沢な、NHKBSでしかできなさそうな番組なんですけれども、そちらで司会をさせてもらいました。

俳句界のトップの俳人たちや、全国、地方で俳句をやっている俳人の人たちと毎週句会ができるというすばらしい機会、実はそのころ、ちょうど大学3年生ですから、就職活動が始まる時期だったんですが、就活より俳句だろうということで、大学院に上がればいいのかと——上がればいいのかというの言い方が悪いですが、大学院に行くことにして、「俳句王国」に打ち込むことになりました。

そうしたら、「俳句王国」は、ありがたいことに6年させていただきまして、6年となると、今度修士に上がって、修士が終わる段階でまだ続く。じゃ、博士に行こうかな。行っていると、いつの間にか新卒採用がなくなったということで、気がつけば、ほかに選択肢がなくなっていたということでもあるのですが、でも、「俳句王国」の場所はすごく勉強になりました。いまの私がつくられたのはあの場所だと思っています。

例えば、ことし2月に亡くなられた金子兜太さんも、毎年、主宰の先生として来てくださっていたのですが、兜太さんは一番初めに私が司会をしたときに番組の主宰をつとめられたのです。そのとき、何とおっしゃったかというと、「季語とか定型とか、そんなのはどうでもいいんだよ。17音にぶっ込めばいいんだよ」ということをおっしゃって、あ、そうか、ぶっ込めばいいのかと思って、次の週に行ったら、今度は伝統派の稲畑汀子さんがいらっちゃって、どっしりと「俳句は季題の文学です。季語が俳句の命です」とおっしゃって、ああ、これはどちらが正しいのか。結局、どちらも正しいし、どちらもそれぞれの方の絶対であり、正解なんですよね。ということは、私は私の正解であり、絶対を探さなければいけないんだということをおっしゃっていただきました。

そうですね、社会に出るタイミングを失って

しまった私は産休も育休もありませんので、なかなか不安定な暮らしではあるんですけども、ただ、好きな俳句のことを毎日考えて暮らせるというのは、ほかに変えがたい幸せだなと思っております。

ですから、今回も、連載がどれだけ大変かは薄々わかってはいたんですけども、それでもやっぱりやりたいという気持ちでお引き受けすることにしました。

しかも、新聞ですから、その新聞を読んでいる人たちというのは、俳句をしていない人がすごく多いわけですよ。ふだんは俳句を詠む人に向けて文章を書くことも多いわけですが、もっと広い、ふだんは俳句に興味がない人でも、ふとその句を読んで俳句について触れる可能性がある、そんなところを担当させてもらえるのだとしたら、俳句を広く、深く知ってもらえる機会、ぜひやりたいと思いました。

やるからには気合いを入れて、もう一人子どもを育てるぞというぐらいの気持ちでやりましたので、この本は第二子です。第一子がいるんですけども、第二子の気持ちでつくりました。

実は、その10月にお話をいただく前、9月に、ずうっと待機児童状態だった息子が、何とか保育園に入れることになりまして、奇跡的に年度途中で保育園に入園が決まって、もしあれが待機児童のままだったら、その翌月にこのお話をいただいて、お引き受けできたかどうか、もしかしたらこの本はなかったかもしれません。まだお乳も飲んでいたので、保育園に送りに行くときにも、母乳を絞って冷凍して、それを持たせて、持たせてといっても、私が全部持っていくんですけども、その子が帰ってくるまでの間の時間で「子規全集」を読み込むところから始めました。

幸い、子規と漱石に関しては資料がたっぷりありましたので、それらを読んでいくと、まあ、楽しいですね。皆さん、子規と漱石の魅力はそれぞれご存じだと思うんですけども、その一端をこうやって一冊にまとめられたことは、私にとっても幸せでした。

ただ、子規の俳句のみで365日とか、漱石の俳句について解説した本とかというのは、これまでもあったんですけども、2人の俳句を一度にこうやって取り上げて、さらに周辺の作家や友人の句まで一緒にまとめるというのは、初めての試みで、類書もなくて、選考資料が少なかったのも、大変といえば大変でしたし、やりがいもありました。

365句選ぶときに、心がけたのは、まずは新聞社の方からもリクエストはあったんですが、その季節に合ったものを選ぶこと。例えば、立冬の日なら、立冬の句がいいなとか、それから子規が亡くなった日なら、その周辺は子規について書きたいなとか、そういう形で、先に、ここは必ずこの句のことやこの季語について書くぞというものが埋まっていて、それ以外のところで、ある程度自由に、その季節に関係する、もしくはそのころに子規と漱石にとって大事な出来事があった、それにまつわる句などを挙げていきました。

2人の関係を感じさせる句を優先

2人の関係性をよく感じさせる俳句というのは優先的に選びました。2人の句を足すと、本当にすごい数になるので、どれを選ぶのかというのも贅沢な悩みだったんですけども、1年間、終わって、まだ2周、3周できるねと言われたときには、ちょっと一旦お休みしましよと言ったのですが、ほんと、何周でもできるぐらい、素晴らしい作品を子規と漱石は私たちに残してくれているんだなということを1年間実感いたしました。

子規と漱石は学生時代からの親友で、東京大学の予備門時代に趣味の寄席を通じて知り合いました。確かに2人の俳句、少し余裕があって、ユーモアがあって、寄席と言われたときに、あ、なるほどなというところがあります。

今回、「子規全集」についている年譜の一冊もよくよく参考にしたんですが、年譜の中では、漱石が子規の家を尋ねたり、子規が漱石の下宿を尋ねたり、折々しているのです。そのとこ

ろには、「漱石来宅」とだけ書いてあります。たった4文字、「漱石来宅」。でも、実際には、来てすぐ「じゃあね」と帰るわけではありませんので、きっと来てからいろんな文学の話、日本の話、たくさんしたと思います。でも、その内容は子規と漱石、2人しか知らない内容になっています。

でも、実はその空白の時間、この時間というのは子規と漱石がまだ何者でもなかった時間なのです。文豪でもない、小説家でもない、何でもなかった、ただの若者だった2人が、一体どんな話をしている、どんなことを考えていたのだろうか、そんなことに思いをはせて、今回書いてきました。その何者でもなかった時期に2人が交わした言葉や考えが、まさに子規を子規に、漱石を漱石にしたはずなのです。

若いころの2人に思いをはせる

どうしても私たち、頼杖の漱石とか、横顔の子規とか、すでに有名になった子規、漱石のことしかなかなか考える機会がありませんが、生きて語り合う2人の若者を追いかけていたというのが私自身の今回の本のコンセプトでした。

子規と漱石は、学生時代から子規が亡くなるまで、手紙をいっぱいやりとりしています。岩波文庫に『漱石・子規往復書簡集』——これは『漱石・子規往復書簡集』なのです。今回、『日めくり子規・漱石』と、一応愛媛にひいきして子規を先にしましたけれども、岩波のほうでは、『漱石・子規往復書簡集』になっておりますが、これも本当に繰り返し読みました。

2人にしかわからないような若者の乗りというんですか、それはちょっと後から読んでも意味がわからないくらい親しい言葉でお互いに書かれている手紙もありました。漱石が書いた手紙のほうが多く収録されているんですが、それは漱石のほうの子規に対してたくさん手紙を出したのではなくて、子規のほうの保管がよかったのです。漱石はポイポイ捨ててしまったので、子規から漱石に送った書簡というのは結構なくなってしまっています。置いておいて

くれたら、どんなことを書いていたのだろうかということも知りたかったことの一つです。

漱石は、子規が結核にかかって、病の苦しみや不安に押しつぶされそうなときに、励ましの手紙を送ったり、自分も俳句を習いたいと言って、たくさん俳句を送りつけて、子規に〇をつけてもらったり添削してもらったりして、そういう形で子規を励ました。

逆に、そうやって子規は明るさを保つことができ、その明るさが、思索的な漱石を開かれた文学の場へと引き出しました。ともに学んで励まし合った2人が、やがて明治時代の新しい文学をみずからの手で切り開いていくことになるわけです。

でも、新聞紙上で私に許された字数の限界があるわけです。1日にいくらでも書いていいですよと言われてたら楽しいんですけども、200字までと枠が決められていて、本当に少ない字数ですので、その決められた枠の中で1句の解説をして、さらにエピソードや関連文献を紹介するというのは、なかなか大変でした。調べたこと、考えたことを削って、削って、削って、10分の1ぐらいにしてやっとおさまるという感じでした。削った情報であと何冊か書けそうなぐらいですかね。

ふだん俳句をつくらぬ周囲の人たちには、「俳句って難しいよね」と言われてしまうことが多いです。書いてある解説を読むとよくわかるんだけど、俳句だけみると、何でこんなことを俳句に詠むのかわからない、ということをよく言われます。ということは、私たち俳人は、解説をしていくということも大事なんじゃないかなということも常々思っていました。

ですから、こういう機会はとてもうれしかったんですけども、17音というのは、データが圧縮されているというか、圧縮されたデータが届いて、それを解凍して読み込むということが必要で、俳句の細かい技術などもわかっていると、より、それが読み解きやすいというところはありますから、俳人として、つくる側の気持ちもわかる人間として、できるだけ解釈は加えようと思いました。

なので、まず初めに、その俳句が17音としてどのような世界を描いているのか、翻訳みたいなものですか、ちょっと翻訳して、解釈して、圧縮データを解凍するという作業を必ず加えることにしました。句だけ挙げて、エピソードを紹介して終わりということはないように……そういう場合も結構多いので、せっかく俳人として書くのなら、しっかり句についても向き合おうと思いました。

あとは、子規や漱石に詳しくない人でも、その句の魅力を楽しんでもらえるように、時には似ているなどと思ったら、ボブディランとか、イエローモンキーとか、いろんな歌手との類似を指摘してみたり、いろんなほかの文学を挙げてみたりしながら、その句の生きた感覚を理解してもらえるように工夫もしました。

例えば、お手元にお配りしている資料の9月3日、きのうの分です、これをちょっとごらんください。例えばこんなふうに書きましたということで、子規の句です。

「鮎はあれど鰻はあれど秋茄子」

そのまんまという句で、まず初めに、現代語訳といってもそのままなんですけれども、「鮎も鰻もいいけど、やっぱり秋茄子だよなあ」という、わかりやすいとはいえ一応現代語訳を入れて、あとは、何でこんなことを俳句にしたのか、作品にするのか、というところは俳句のわからなさにもつながっているのです、ここをちょっと補足して、例えば鮎や鰻のような「ぜいたく食材と比較し、秋茄子の価値を引き上げた。価値の転換は文学の大切な作用」というふうに入れてみたりもします。

そして、その後、具体的なエピソードや背景があれば、補足します。この場合は、ちょうど明治28年の秋、その時期というのは、松山に赴任していた夏目漱石の下宿に、満州から体を壊して帰ってきた正岡子規がふるさとに帰省して、漱石の下宿の愚陀仏庵に2人で2カ月近く同居生活を送るという、そういう劇的な2カ月なんです。秋というのは2人にとってもとても大切な季節で、連載していても、この9月が近づいてくると、自分の気持ちがすごく盛

り上がってくるのを感じたんですけれども、その愚陀仏庵という漱石の下宿で、2階に漱石、1階に子規がいて、2人は文学の話、句会をしたりして濃密な時間を過ごします。

「愚陀仏庵同居中、子規は西洋料理や鰻を出前し、漱石の金で勝手に食べた」。子規はどんどん漱石の金を食い潰していくんですね。

これは漱石の文章です。「大将は昼になると蒲焼を取り寄せて、御承知の通りぴちゃぴちゃと音をさせて食う」。ご承知のとおりと言われると、みんな知っていたのかと思いますが、これは漱石の証言。

子規の学友・柳原極堂からみた2人

ここで出てくる柳原極堂というのは、子規、漱石と同級生。子規の松山中学時代からの同級生で、彼も実は生誕150年だったのです。裏テーマとしては、柳原極堂も取り上げて、月に1度は彼について書きながら、極堂の目からみた子規や漱石というものも描ければいいなど、そのことでより立体的に2人が浮かび上がればいいなという気持ちがありました。

「柳原極堂も、漱石が子規の火鉢の下に十円札を押し込むのを目撃した」。ちゃんと漱石が子規をこういう形で養ってあげていたんですね。この漱石の姿を振り返って極堂が『友人子規』という文章を残しているんですけれども、これも非常に貴重な資料でした。

こんなふうに、ちょっと句の解説をしてからエピソードを添えたりしながら、その時代の彼らの息づかいが聞こえるように努力してみました。

新聞なので、毎日、もちろんとっている人はみなんですけれども、たまたま松山に旅行して、道後温泉に泊まって、朝、愛媛新聞を開いた人がその句をみて、「あ、なるほど、こういう句なんだ、へえ、こんなことがあったんだ」というふうに、一回だけ読んでも、その句のこと、子規や漱石のことが理解できるように、読み切りを意識して書きました。なので、本としても、前から読むだけではなくて、どこから読んでも

いいようになっていくかなと思います。

そのおかげもあってか、連載を始めてから読者の反響も、新聞紙面上で読者欄に、「楽しみで読んでいます」なんていうことを寄せてもらって、励みになりました。

あと、ちょっと驚きだったのは、SNSで、文豪好きの若い人たちがいるんです。いまいろんなゲームにもなっていたりして、子規や漱石も、そのキャラクターの一人として、文豪たちのお互いの友情を楽しむというのが一つの文系女子のブームになっていて、その人たちが話題にしてくださって、例えば「毎日子規や漱石の話が新聞の紙面上で読めるなんて、私も愛媛に生まれたかった」というつぶやきを書きくださった方もいて、これは愛媛の文化土壤ごと褒めていただいたような気がして、愛媛出身の人間としてもとてもうれしかったです。

この文豪好きな若い人たちというのは、本当に文学に造詣が深いので、私が一生懸命調べて書いた子規や漱石の関係者の、誰も知らないような俳句でも、「ええ、この人がこんな句をつくっていたのか」というふうに感激して下さったりして、そうやって受けとめてくださる方がいるのは励みになりました。

あとは、担当の記者さんにも恵まれて、1年間担当して下さった愛媛新聞の記者の方は、漱石の研究をずうっと個人的に続けられている方だったんです。例えば、学生時代に、子規に影響を受けて、漱石が千葉の房総を歩いて、『木屑録』という紀行文を書くんですけど、「その紀行文を書いたルートを、今度の休みに歩いてこようと思います」などというメールが、原稿を受け取ったときの返信に来たりすると、こっちもうれしくなりますよね。何かそういう理解して下さる方が受けとめてくださると思うと、とても書くモチベーションが上がりましたし、この記者さんがいらっしやらなかったら、とても1年書き通せなかったと思いますので、本当にお礼を言いたいと思っています。

子規の句は簡単、漱石の句は難解

では、ここから、せっかくなので、俳句からみえてくる子規と漱石の性格や人柄について、感じたことを少しお話ししてみたいのですが、一言で言うと、子規の句は簡単、漱石の句は難しいのです。

例えば、そこに9月20日、2月13日の句を、それぞれ子規の句、漱石の句、挙げていますが、9月20日の句。

「珍しきみかむや母に参らする」

これは、「珍しい蜜柑だ、貴重だから母上に献上しよう…素直な敬慕の念」、これだけで句の解説は終わってしまうのです。それぐらいわかりやすい句です。ですので、その後、子規が家族の団欒を重要視していたということの子規の文献から拾ってみたり、さらに子規が亡くなった夜のことを、河東碧梧桐が書き残しているのですが、その中で、お母さんが、子規の「苦しみによじれた遺体を仰臥に整えるとき」、母八重さんがその肩に触れて、「サア、も一遍痛いというてお見」——これは伊予弁ですけれども、「言うてみなさい」ということです。それで、お母さんの「眼からぼたぼた雫が落ちた」というのを、非常に客観的に碧梧桐は書き残しています。

このエピソードを、9月20日に、子規の亡くなった翌日に紹介したくて、じゃ、どの句がいいかなということで、この蜜柑の句を選びました。

一方、2月13日、漱石の句です。

「鶴獲たり月夜に梅を植ん哉」

不思議な句ですよ。何を言っているのかなと思いますけれども、これは「梅妻鶴子」という北宋の詩人であった林逋（りんぼ）という人の故事を踏まえたものです。俗世を離れた風雅な隠遁生活を「梅妻鶴子」と言うのですが、林逋は湖のほとりで、梅を妻に見立て、鶴を我が子に見立てて、一人清らかに暮らしたという人です。

この人を踏まえているんですが、芭蕉も『野ざらし紀行』の中で、この林逋を踏まえて、京都の山荘に招かれた際に、

「梅白し昨日ふや鶴を盗れし」

と詠んでいます。これは、梅が白いな、その白梅が見事だけど、あれ、鶴が見当たらない。きのう盗まれたんですか。本当だったら、梅には鶴がいるはずなんだけど、と、この林逋の故事を踏まえて梅を褒めました。

漱石の句は、逆に、盗まれた鶴を得た鶴盗人のような言い方で、実はここ、指摘はされていなくて、この芭蕉の『野ざらし紀行』の句は、この漱石の句と関連させて書いているものは私がさっとみた限りはほかになかったんです。けれども、こういうところも、実は漱石も踏まえて書いているんじゃないかなという気がしています。

こういったものは結構あって、漱石、本当に背景にしている文献の説明だけで、ともすれば終わってしまうぐらい、いろんな知識を踏まえて俳句を詠んでいます。まだまだ漱石の俳句は未知のジャンルで、漱石の全集の俳句のところをみても、説明のところに、この句は、この漢詩を踏まえています、とまでは書いてくれているんです。でも、踏まえて、どんなふうにそれをアレンジして、漱石がそこにどんな意味を加えたのかということまでは書いていないのです。

ですから、それは私たちがまだやらなければいけない仕事として残されているなということを感じました。ですから、できるだけ漱石の意図を考えながら句の解釈を行うように心がけました。

さらに、まだ関係を指摘されていない先行文献もあって、この芭蕉の句もそうですけれども、この連載の中でも初めて指摘した関係というのは幾つかあるんですけれども、でも、200字なので、これを初めて発見したよ、みたいなことも言えないから、さらっと入れてあるんですが、研究者としては、漱石の句、専門にして、一生取り組んでもいいぐらい価値のある、未開のジャンルだなということ再認識しました。

漱石なくして「柿くへば」の句は生まれず

では、その後に書いてある句、1ページ目の

最後の句をみてください。

「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」

あれ、何か聞いたことあるという句ですよ。これは明治28年9月6日、愛媛新聞の前身である海南新聞に載った俳句です。ちょうど愚陀仏庵で子規と漱石が同居して、一緒に句会をしている時期です。鐘をついたら銀杏が散る、そんな建長寺でした、という句です。

お隣が、子規の代表句。

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」

もう、形が全くそっくり。しかも、子規が詠んだのは、同じ年の10月なので、漱石の句よりも後なのです。漱石の句をもちろん子規は知っていたと思いますので、その愚陀仏庵での共同生活が終わって、子規も体が大分よくなったので、東京の根岸に戻る。帰る途中に奈良に寄りたいから、「漱石君、お金を貸してよ」と言って、漱石にまた、鰻だけでなく旅費までせびり、それで奈良に寄って詠んだのがこの俳句です。しかも、句の形まで借りている。子規、本当にちゃっかりしているなと思うんですけども、世が世なら訴えられると負けるレベルですよ。

でも、あの当時は、著作権というよりも、俳句はみんなで作るもの、共同の詩でしたから、漱石がこんな俳句をつくっていたけど、でも、「僕は奈良に来て、建長寺でなくて、法隆寺でこんな句をつくってみたよ、漱石君、どうだい」というふうに、漱石に呼びかけてつくっている句じゃなかろうかと思います。漱石もこれを見て、「お、やるなあ」と思ったか、「いや、僕のほうがいい」と思ったかはわかりませんが、この句以前にも、そんなやりとりを子規と漱石はやっています。

子規が富士山をみて、すごいなあと、西行と富士山で詠んでいるんですけれども、子規が詠んだこの句に対して、漱石が、いや、僕はこんなふうには詠んだよ、君の句よりいいだろう、ということを手紙に書いたりもしています。

そういう長年の友情のやりとりの中で、この「柿くへば」の句も生まれてきたんですね。2人の友情があって、漱石のアシストがあって初

めて子規の代表句が生まれた。逆に、漱石がいなければ、「柿くへば」の句はこの世に生まれなかったということになります。

では、2枚目をごらんください。ほかにも、少し、漱石と子規のそれぞれの俳句を挙げて、それぞれの人間性について、少しだけみてみたいと思います。

漱石の俳句は、子規にも、奇想天外な発想がおもしろいと評価されています。例えば1月16日の句、どんなふうを読むかわかりますか。

「東西南北より吹雪哉」

「とうざいなんぼくよりふぶきかな」と読むと音が足りないので、「ひがしにしみなみきたよりふぶきかな」と読むと、ちょうど五七五になるんですね。これは絶対自覚的にやっていると思うんですけれども、おお、なるほど、うまいことやったなと思います。

次の7月5日。

「無人島の天子とならば涼しかろ」

天子というのは天皇ですよ。無人島の天皇ですから、つまり臣民はいないわけですが、無人島の天皇だったら、つまり、誰もいないところで堂々と偉そうにしていたら涼しいだろうな。つまり、権力というものを逆に捉えて、こんなふうになしているわけです。ユニークな発想、ついクスリと笑みがこぼれるというのが漱石の余裕です。

5月4日の「落ちさまに虻を伏せたる椿哉」というのは、これは『草枕』という彼の小説の中で、旅館の人がみんないなくなっちゃったということを言うときに、虻になって、椿の下に伏せられて、その中で夢をみているんじゃないだろうかというような、一節があるんです。

それよりもずっと前、明治30年にこんな俳句をつくっている。つまり、かつてつくった俳句が、後で小説を書くときのネタ帳みたいになっていたんですね。俳句をつくったのは、漱石にとって決してむだではなくて、かつての自分の俳句が、いろんな形で小説の中に紛れ込んできます。

俳句からは江戸っ子の印象強い漱石

それから、もう一つ、漱石がどんな人だったかということ、「悩める近代人」というイメージが強いと思うのですが、俳句を通してみた漱石というのは、人情豊かな江戸っ子という印象が強いです。まさに東京生まれの江戸っ子なんですけれども、子規が結構試験をさぼったりするんですが、漱石は世話をやいて、先生のところに行き、どうやったら追試を受けられるかチェックして、友だちにノートを借りて、「さあ、子規君、ちゃんと落第しないように試験を受けなさい」と言ったり、本当に人のために世話をやいてあげる人なんです。

4月7日。

「空に消ゆる鐸の響や春の塔」

空に鐘の響きがゴーンと消えていく、そして、そこには春の塔が1本立っているというだけなんですけれども、これは子規と漱石の大学の同級生である、哲学者の米山保三郎という人が早く亡くなってしまったんです。その人の追悼句として書いた俳句です。彼は空間に関する哲学をやっていたので、空に消えていく鐘の響き、空間を感じさせる、そんな俳句をここに詠んでいるのです。

次の4月13日。

「永き日や欠伸うつして別れ行く」

これは漱石が松山中学に1年間赴任した後、松山を去るときに高浜虚子に送った句です。

その数日前に、虚子は「永き日を君あくびでもしているか」という句をつくっています。

これは何のためにつくったかということ、藤野古白という子規のいとこに当たる俳人がいました。子規や虚子や碧梧桐や漱石と一緒に句会を囲んだり、文学活動をしていました。でも、若くしてピストル自殺をしてしまうのです。その古白を思って虚子が詠んだのが「永き日を君あくびでもしているか」。きっと、古白君、あっちであくびでもしているのかなと詠んだ、それを踏まえて、漱石は、

「永き日や欠伸うつして別れ行く」

生きている虚子君と僕も、あくびをうつし合っ
て、こうやってそれぞれの道に別れていくんだ
なと詠んだんですね。関係性を非常に重視して、
その中で自分がどう思ったか、何ができるのか、
それを考えたのが漱石という人だったんだな
ということを改めて、こういう挨拶句からも感
じます。

明治 25 年の「鳴くならば満月になけほとゝ
ぎす」というのは、子規が病気になって、大学
を途中で退学をして、新聞社に入るということ
を決めたときに子規に送った句です。子規はで
きるだけ早く文筆活動に入りたいと思ってそ
うしたんですけれども、漱石は大学に引きとめ
ます。どうせあとちょっとなんだから、ちゃん
と大学を卒業して、鳴くならば、単位を全部取
って、満月に鳴きなさい、だから、このほとと
ぎすは子規のことですね。「子規」という名前
は「ホトトギス」という意味ですから、これは
子規に対して励まして送った俳句でした。

結局、子規はその漱石にたえずに、やめて、
新聞のほうに入るわけです。

次の 8 月 21 日のは、漱石の弟子の松根東洋
城という人に送った俳句です。

「朝貌や惚れた女も二三日」

これもおもしろい句ですよ。東洋城がその
ころ、駆け落ちするか心中するかと言っていた
ぐらい、ちょっと恋愛問題で悩んでいた、その
東洋城に、いやいや、女なんて、ほれていても、
朝の顔をみてごらんと。これはアサガオという
花と、多分朝の寝起きの顔をかけているのでは
ないかと思うんですが、2~3 日で惚れた女だ
って飽きちゃうんだから、そんなに思い詰めな
くていいんだよ、と言ってあげている句です。
漱石のユーモアまじりの優しさが感じられる
句ですね。

「コールドネス」と漱石は子規を評す

こういう句をみていると、漱石というのは、
ユーモアを使って人を励ました、「励ましの人」

だったんだなと思います。

では、子規はどうだったかということ、実は、
漱石は子規のことを手紙の中で、「coldness」
と言っています。つまり、「冷淡」ということ
です。君は冷淡だね、「君の coldness には恐れ
入りやす」ということを冗談まじりに言ってい
るんですけども、いままで、子規というのは、
周囲に人が集まってきて、愛されている印象で
したが、子規自身は、実は冷淡なところがあっ
たのかもしれない。

でも、冷淡という言い方がちょっときつい
ですけれども、「客観的」と言いかえれば、さ
もありなんという感じです。俳句というのがそ
もそも世界を一步引いて見つめるものだと思
いますが、例えば、

「鷺の子の兎をつかむ霰かな」

これはワシの子どもがウサギをつかむ。ウサ
ギはそれで食べられてしまうが、ワシの子もま
たあられの降る厳しい寒さの中で生き抜かな
ければいけない。どちらも客観的に命の厳し
さを見詰めていますね。

俳句というのは、こういうふうには、少し自然
や命というのを引いたところから見詰める
ところがあります。その視線は自分にも向きます。
明治 35 年、亡くなる年に、子規は自分のこと
をこういうふうには詠みました。

「活きた目をつゞきに來るか蠅の聲」

腐ったものにたかる蠅よ、私の生きた目まで
つゞきに來るのかと言っています。

もう一つ、明治 28 年のこの句は、「行く我に
とどまる汝に秋二つ」。

これは、子規が愚陀仏庵の生活を終えて松山
を去るときに漱石に宛てた俳句です。行く私に、
そしてとどまる漱石君、君に、秋はそれぞれに
2つあるなど。これまで一つの秋を共有してい
たのに、それが別々になるという感慨を詠んだ
句です。

これも私に中心が置かれるのではなくて、行
く我と、とどまる汝、それぞれを同質に描いて
います。こうした子規の客観性について、大江
健三郎は「子規はデモクラティックな人だ」と

ということも言っています。つまり、民主的だということですね。これは実はコールドネスと共通するところがあるのではないかと思うのです。ありとあらゆることどもについて、相対化するからこそ、子規というのは全てのことにデモクラティックであるのだ、ということをお大江健三郎は言っています。

つまり、どんな命も、友人だろうが、私だろうが、家族だろうが、ウサギだろうが、ハエだろうが、何だろうが、全て同じ命であるという視点に立つと、それはある意味では冷淡ですよ、突き放したところもあるかもしれないけれども、誰に対しても平等で、とてもデモクラティックなものであると言われれば、なるほど、そうだなという感じがします。

後半の3つは、やはり子規の生きる力が出ている句です。

例えば、明治28年、満州に行って帰ってくる船の中で、ひどく体調を崩してしまって、瀕死の状態になるんですが、神戸の病院に入ったときに、虚子と碧梧桐がたくさんイチゴを摘んでくれるんですね。そのイチゴを喜んだのがこの句です。

「もりあげてやまいうれしきいちご哉」

なかなか病がうれしいとは言えないと思います。病気は嫌なことですけども、それを、このイチゴが食べられるのは、自分が病気になっているからだ、みんながこういうふうに集めてくれるイチゴがうれしい、病がうれしいと、マイナスをプラスに変える力が子規には備わっていました。

亡くなる直前の句も2句挙げましたが、例えば、「汐干潟うれし物皆生きて居る」。何か死ぬところではなく、汐干潟に生きている貝や鳥や人間たち、みんなの命が躍動していることを子規はまぶしく喜んでいました。

8月8日の句、「病間や桃食ひながら李画く」。このころ、もうモルヒネを打たねば耐えられぬ痛みで、薬の力でほんの少しだけ痛みを忘れられる時間があつた。そのときに、子規は何をしたかということ、絵を描いたり文章を書いたり、食べたりしたんですね。モモを食べて、スモモ

を描いて、死ぬ間際まで、どこまでも生きる人だったというのが子規でした。

次に挙げている5句は、子規と漱石にとって特に2人の関係性にかかわる句でした。

漱石の初句は子規への励まし

例えば、1句目は、実は漱石が初めてつくった俳句です。漱石の初めての句は、子規に宛ててつくられた句でした。

「帰ろふと泣かずに笑へ時鳥」

これは子規が明治22年、学生のときに咯血するのです。血を吐いて、結核だと診断されてしまった、それを心配した漱石が、わざわざ子規のかかっている病院に行って、その先生に話を聞いたり、その先生が冷たかったから、セカンドオピニオンを子規に勧めて、その手紙の中で、「もう松山に帰るなんて言って泣かないで、笑ってくれよ、ホトトギス君」、つまり子規君というふうに応えました。漱石が、もちろんこの前にも漢詩など書いてはいますけれども、俳句を初めてつくったのは、子規がいたからだったのです。子規のために書き始めた俳句でした。

ほかにもいろいろあるんですけども、「糸瓜咲てもみていただこうかな。2人の違いを象徴的にあらわす野菜として、ヘチマとカボチャがあります。子規が自分が亡くなる直前に詠んだのが、「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」という句でした。ヘチマの花が咲いて、その黄色と同じように黄色い痰が喉の奥に詰まって死んでしまった、そんな仏、遺骸がここに転がっている、それは子規自身の遺骸なんですけれども、それを客観的に見詰めているのです。自分の死をも見詰めた子規でした。

一方、漱石は、この句は明治28年の段階で詠んでいるんですけども、後で子規のことを振り返って、この句を挙げています。

「どつしりと尻を据えたる南瓜かな」

子規がヘチマなんだとしたら、僕はカボチャだよと。このころ、漱石は「ホトトギス」に書

いた『我輩ハ猫デアル』がヒットして、一躍有名小説家になるんですね。周りは、もしかしたら心配していたのかもしれないんですけども、大丈夫だよ、子規君、僕はどっしりと尻を据えて、そう簡単には動かないぞ、ということ、を、『我輩ハ猫デアル』の序文に、この句を挙げて、子規へのメッセージとして書いています。ヘチマとカボチャ、この2つが子規と漱石を代表する野菜として、対照的に、でもウリという点では共通しているという、2人の関係をよく教えてくれるものです。

子規の私撰「なじみ集」からの発見

もう一つ紹介しておきたいのは、『なじみ集』という資料です。これは子規が自分になじみのある人物の俳句を選んで筆記した私撰のアンソロジーなんですけど、約100人分、何と4,000句以上が収録されています。

子規は漱石に、書いてばかりいないで、アイデア(発想)を育てろと注意されたこともあるんですが、とにかく子規は収集癖のある、書いて書いて書きまくる人でした。

この『なじみ集』というのは、そういう文献があるぞということだけは知られていたんですけども、現物が確認されていない幻の一書だったのです。それが平成21年に、古書市で発見されて、子規記念博物館が所蔵して、数年前に翻刻されました。新資料なので、ほとんど未開拓なんですけれども、子規の周囲の人たちの俳句を知るには絶好の一冊ということで、今回、子規の周囲の人の句は、できるだけこの『なじみ集』から挙げるように心がけました。

例えば、資料にある清水則遠という人は、子規の小さいころからの幼なじみです。大学時代に脚気で急に亡くなってしまって、子規は悲しむのですけれども、同じふるさとの同級生である秋山真之に励まされながら、喪主を務めて、東京でちゃんと葬儀をして実家の則遠の家族にも報告をしたという、そのぐらい親しい人でした。

彼の句も、『なじみ集』に2句だけ載ってい

るのです。俳人ではなくて、ただの友だちなんですけれども、その句が2句載っているということは、下宿などで句会をやって、「おい、則遠、おまえもやれよ」と言って、ちょっとやった、そのときにふとつくった、これは下手な句なんですけれども、「螢火にひかれてまよふ土手の道」。

とても幼い、かわいらしい句なんですけれども、でも、純粋な句ですよ。こういう句が、ちゃんと子規の筆記によって残されている。つまりは則遠がいまに生き残っていることにもつながりますので、こういう形で2句、『なじみ集』に子規が書き残したということにもしみじみ感動しながら書き進めてきました。

最後に、1月1日と12月31日の句を挙げてあります。やはり連載の初めと最後なので、これだけは決めておこうと思って、まとめました。どちらも明治30年に書かれた句です。2人がもうすぐ30歳を迎えるという年の句です。漱石の句で始めます。

「詩を書かん君墨を磨れ今朝の春」

これは、君というのは新婚の奥さんだという説が強いんですけども、でも、何か「君」と呼びかけたときに、誰かと一緒につくる詩なんだ、そういう意識が強くあらわれてくると思います。強い言葉。連載を始めるのに、私も刺激になる俳句でした。

最後の子規の句。

「来年はよき句つくらんとぞ思ふ」

とっても素直な句で、これこそ、これ以上の説明は要らない句です。今年は何れだけできたかな、でも、来年はいい句が作りたいな。もちろん、病気になって、どれだけ生きられるかわからない時期でしたけれども、それでも、だからこそ、こんなふうに素直に思えた。

どちらの句も、文学に真っ直ぐ向き合った2人の輝く瞳がみえてくる2句です。志を同じくしていた2人の思いがよく伝わってくる句です。

子規が亡くなったのは34歳のときで、実は去年、私が連載したとき、私自身もちょうど34歳でした。まだまだ書きたいと思いがら

死んでいった子規が、その後生きるこれからを、私は創作者として、何をどう書いていくべきかということを考えさせていただいた連載でもありました。

最後に、プロフィールの最後のところに、「子規・漱石に寄せて3句」ということで挙げております。

「子規は食べ漱石は読みつくつくし」

これが、ちょうど愚陀仏庵で2人が生活していた、書かれていない部分でどんな生活しておったのかなということに思いをはせた句でした。きっと子規はまたピチャピチャ音を立てて何かを食べていて、漱石は勉強のために本を読んでいて、外ではツクツクボーシが静かに聞こえていた、そんな愚陀仏庵の一日もあったんじゃないかと思って、想像して詠みました。

「楽観的蜜柑と思索的林檎」というのは、さつき、ヘチマとカボチャがありました、例えば子規がミカンだとしたら、漱石はリンゴかもしれない、だとしたら、ミカンというのは楽観的な果物で、リンゴというのは思索的で、やっぱり2人の姿をこういうふうにと託してみてもおもしろいかなと思って詠んだ句です。

最後の句は、2人の写真を思いながら詠んだ句でした。

「横顔も頬杖も春待つしぐさ」

子規の横顔も、漱石の頬杖も、いつか来る新しい時代を待っている、春を待つしぐさだとしたら、あの表情も、少しその向こう側の気持ちが透けてみえてくるような気がして、これも寄せてつくった句です。

本当に豊かな対話の時間を持たせてもらいました。語り尽くせない部分は一冊にまとめてありますので、また触れていただければうれしいです。

以上です。

◆ 質 疑 応 答 ◆

司会 ありがとうございます。

それでは、私のほうから少し質問させていた

だいて、あと会場のほうから……。

お話を聞いて、本も読ませていただいたのですが、夏目漱石は悩める近代人のイメージが非常に強いと、本にもありますが、人情豊かな江戸っ子という見方が非常におもしろいなと思いました。この「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」を僕は知らなくて、何だと思った。非常にユーモラスな句で、それを子規がパクったというわけじゃないですが、参考にして、またいい句をつくった、そういう関係だったんだなと思って、非常に楽しくお話を聞かせていただきました。

お聞きしたいのは、子規の句で一番好きな句、漱石の句で一番好きな句を教えてください。1句ずつでは難しいと言われたら、2句でもいいのですが。

私が好きな2人の句

神野 子規の句だと、「夏嵐机上の白紙飛び尽す」という句が昔からずっと好きな句です。

ただ、とても映像的な句で、夏の嵐が吹いてきたら、机の上の白紙が全部飛んで、アニメのワンシーンにしてもいいような一句なんですけれども、でも、そこに、子規が短い人生を燃焼させた、その姿が重なって見えるような気もして、とてもその光に引かれている句です。

漱石の句だと、「堇程な小さき人に生れたし」という句があって、これは有名な句ですけれども、スマイルというものに視線を落として、同じ目の高さで、スマイルにしゃがんでこの句を読んでいるんだろうなと思うと、しゃがんでいる漱石を想像して、とても身近に感じられる句でした。こういう素直な気持ちを言えるというところに、漱石の魅力を感じた句です。

司会 漱石を再発見したみたい、そんな感じもしました。

それでは、皆さんのほうから質問があれば、受けたいと思います。

質問 熊の句ですが、子規は、熊は冬眠するものと知っていたうえで句を書いたと思うん

だけれども、これはどうしてですか。

神野 まだ冬眠するぎりぎりなんですかね。どうなんでしょうね。だから、逆に熊の生態を知り尽くしていたら、もしかしたらこういう句になっていないのかもしれないんですけども。

質問 知っていると思うんだけどな。

神野 そうですね、言われてみれば、確かに、どうしたことなんでしょう。おもしろい指摘ですね。「うつむいて谷見る熊や雪の岩」。

熊の生態については、私も調べてみます。

質問 いいお話をどうもありがとうございました。

先生は、若手俳人の第一人者だと思うものですからお聞きするのですが、いま俳句甲子園だとか、いろいろ若い人の間で俳句がかなり根強い人気があると思います。これからの俳句をどうみられているか、どう考えられているか、お聞きしたいのですが。

神野 いまおっしゃっていただいたように、俳句というのは長らく少子高齢化を凝縮したような世界だったんですけども、いまもちろん年齢の高い方が多いですが、でも、いま若い人がどんどん俳句を始めています。それはいまご指摘にあった俳句甲子園だとか、ほかにも若手向けの俳句の賞などが新設されたりしたこともあって、どんどんいま若い人が俳句を始めています。

ですから、その人たちが新しい子規・漱石になって、俳句の世界を変えてくれるんじゃないかなと思っています。もちろん、私もその中の一人として、変えていきたいかなと思っている志はありますし、子規も当時、旧派の俳諧宗匠がたくさんいた俳句の世界を、新しい時代の文学として変えようと一生懸命短い人生の中で頑張ったわけですけども、時代を変える力というのは、若い世代のほうが強い力を持っているはずなので。いまの私たちからみて、もしかしたらいまの俳句の世界は教義的になっている部分があるかなという気はしています。

これはこうしてはいけないとか、ここはこうすべきであるというようなものが多いなどという印象はあるのですが、正岡子規自身も、別に何も知らなくても俳句はつくれるんだ、ということ「俳諧大要」という文章の中で言っています。本当にそうだと思います。

何のために俳句を詠むのか、何をそこに込めていくのかということをお忘れなければ、若い人たちが、そして俳句をつくる人たちがそれを忘れずに自分の俳句をつくっていくことができたなら、新しい時代の俳句というのはこれからも書き継がれていくと信じています。

司会 では、そろそろ時間なので、紗希さんがお書きになった揮毫を紹介します。先ほど読んでいただきましたけれども、「子規は食べ漱石は読みつくつくし」。

さらに一言、何かつけ加えることがあれば。

神野 そうですね、ことしはツクツクシがあまり聞こえなかったというコメントもありました。本当にその年によって、同じ季語でもみえ方が変わるように、俳句も、子規や漱石の句も、去年は私はこのように読みましたが、またことし、来年、この先、違ったふうに読めてくることもあるでしょう。多分皆さんが読んでくださると、違う角度からその句の本質がみえることもあると思います。また私も子規や漱石の句を読みたいと思いますし、皆さんもこれを機会にまた触れていただければ、そして自分を重ねていただければうれしいです。

司会 本当にありがとうございました。

神野 こちらこそ、ありがとうございました。

文責・編集部